

ラベニユ・ドウ・メルヴェイユー

sasagani

ミシェル・カルパンティエが目覚めたのは、見覚えのない旅籠の一室だった。

夏風が緩やかに移ろうその部屋には寝台と椅子以外は家具や調度の類が一切ない。

「ここはどこだ？」

殺風景な部屋の寝台で鷲鼻の三十路男が首を傾げていると、戸が勢いよく開いた。

「あら、起きたみたいね」

入ってきたのは、赤いシャペロン（縁なし帽）を被った少女だった。栗色の瞳。十二、三歳くらいで頬にはそばかすが散っている。

「もうお昼よ。君ってばお寝坊さんなのね」

「ええと……」

記憶にない少女の登場に、ミシェルはますます困惑する。

「君は誰だ？ ここはどこなんだ？」

娘ほど年の離れた少女に赤ん坊扱いをされ、ミシェルは面食らいながら訊ねる。

「あたしはマリーで、ここはヴィヨンヌ。アヴェロワーニュの中心都市よ」

「……ヴィヨンヌ！ 大聖堂の街か！」

おぼろげだった頭の中がはっきりとする。

「ああそうだ。私は同志とともにこの街に向かっていたのだ。その途中で……あの森で、私たちは――」

語尾を掠れさせ、ミシェルは頭を抱える。見る間にその顔から血の気が失せていった。

初夏の鮮やかな夕、ミシエルの姿は馬上にあり、三人の仲間と共に深い森の道を駆けていた。一様に白い修道服の上に黒い外套を着込む彼らは、ドミニコ会の会士たちだった。例外なく痩せているのは、私有財産を認めない托鉢修道会の会則を遵守している何よりの証拠である。

それも、ただの修道士ではない。彼らは教皇庁から直に任命された異端審問官の一団だった。

異端とは、正統と対をなす概念であり、今日のキリスト教世界において教えられるまま順応せず、自分自身で信念を確立した者を指す。正統を自負する者が、自分たちこそが正義という意識を排斥の理由として一方的に異端と決めつける。

つまり、異端はあくまで同じカトリックの中の話だった。

その異端――正当たるカトリック教会の信仰にそぐわない教義を信奉する者を捜し出し、各地域の司教や権力から独立した権威を以て訊問をし、ときにはさらなる強硬手段を用いて自白を引き出して判決を下すのが異端審問官だった。

救済を目指す修道士でありながら恐怖をもたらすその役割を任せられることの多かったドミニコ会士たちは、その名をラテン語でもじり「神の犬（ドミニ・カニス）」などと揶揄されていた。

そんな神の犬として今回ミシエルらに与えられた使命は、アヴェロワーニュ地方の異端調査だ

った。南フランスはトゥールーズから派遣された四人は、数日前にアヴェロワーニュ南部のクシムに到着するなり寸暇も惜しんで仕事に取りかかった。生きながら昇天した伝説を持つ聖アゼダラクが司教を務めたクシムは後に回し、夜明けと共にイゾワル河を渡った先のペリゴンにある大修道院に向かった。

ベネディクト会の大修道院長テオフィルの快い歓待を受けたミシェルらは、噂に聞くペリゴンの大図書館を案内されながらアヴェロワーニュの異端について情報を得ようとしたが、結局これといった有益な話は出なかった。

「もう日が暮れます。今晚は泊まっていかれるとよろしかろう。このところ、森には黒い人狼（ルウ・ガルウ）がよく出没するそうですからな」

替わりに話題に出たのは、異端ではなく怪物の噂だった。

人狼――狼に憑かれた人とも、人に化けた狼ともいわれる幻想世界（イマジネール）の住人である。その半獣半人の怪物が、ここひと月あまりで八人もの人間を殺害しているのだという。

大修道院長はもう一つの名物であるワインを用意して一晩の逗留を勧めてきたが、ミシェルはその申し出を丁重に断り、大聖堂のある都市ヴィヨンヌへの道を急いだのだった。

赤く暮れなずむ陽の中、底の見えない湖のような深い森を歩きながら、ミシェルはぼつりと呟く。

「これがアヴェロワーニュか。カルカソンヌに比べたらよっぽど神の国だな」

南フランスの街カルカソンヌはミシエルの郷里だ。二百年前から異端が根付き、大聖堂ならぬ異端審問のための塔が有名だった。

皮肉げに小さくひとりごちるミシエルの心中に後悔の念が広がっていく。

「一晩くらいなら、英気を養うのにちょうど良かったかもしれないな」

無言で後に続く部下たちに対し、ミシエルは微かな申し訳なさを感じた。

清貧を旨とするとはいえ、そのくらいの息抜きは許されるだろう。使命は重大だが、一刻一秒を争うようなものではない。むしろ腰を落ち着けてじっくりと聴き取りを行った方が効果があったかもしれない。テオフィル修道院長が見せた友好的な態度は警戒心の顕れで、実のところアヴェロワーニュには地方権力と結び付いた異端信仰が蔓延しつつあるのかもしれない。逗留の誘いも、お互いワインで口の滑りを良くするのが目的だったとすれば、ミシエルは一つの機会を失ったことになる。

――のだが、実のところそんな使命感はミシエルの抱く後悔の中では大した割合を占めてはいなかった。

修道院の壮観な大図書館が瞼に焼き付いて離れない。コプト語の聖書、パピルスやヴェラムの巻物や豪華な装丁のイスラムの書物。のみならず比較的近年に刊行されたヤコブスの『黄金伝説』や聖フランチェスコの詩作。他にも『ロランの歌』や『ブリタニア列王伝』、クレティアンの『ランスロ』、どうやって入手したのか北欧の古い詩集らしき物もあった。どれも垂涎を禁じ得ない著作ばかりである。

商家の末っ子に生まれたミシエルは、親の教育方針により雑多な書物に囲まれて幼少期を過ごした。書物そのものへの興味もさることながら、アルチュル王ものやケルト人の伝承を元にした

ブルターニュものなど物語には幼い頃から目がなかった。

そう言えば、人狼についての話が記されたマリー・ド・フランスの『レー』も蔵書にあった。あの物語詩の中で人狼は別の呼ばれ方をしていた。確かブルトン語だと覚えているが、何と呼ばれていたかは思い出せなかった。

書物を一度手に取り、頁に目を這わせ、物語の情景を思い浮かべてしまえば他のことは一切手につかなくなる。そんな己の性格を熟知していたため、ミシェルは慌ててあの場を辞したのだった。

そんな残念を表すかのように、夕焼けはくすみ、赤黒く染まっていく。平仄を合わせるように森に満ち溢れていた生命の息吹が変質していくのをミシェルは感じた。とめどなく流れていた輝く波がたわみ、ある種の植物の花弁が発する熟しきった果実のような甘く濃い香りが漂い始めていた。

「アヴェロワーニュの夜の森……」

眩いてみて、途端に近くに聳える古城が不気味に見え始めた。テオフィルから聞いたところによると、フォスフラムと呼ばれるその森の城には古くから吸血鬼が住み着いていたが、とある吟遊詩人の手によって滅ぼされたという。

人狼といい、また幻想世界の存在である。そんなものが本当にいるのか。子どもの頃には寝物語に聞かされて大層恐ろしく思えたが、分別のつく大人になり、また客観性と冷静さを求められる異端審問官の職務を遂行してきてそんなものがないことははっきりわかっている。

現実的に思考して安心する一方で、ミシェルは何だか無性に心が貧しくなった気がした。

本の虫だったミシェルがドミニコ会に入信した理由は、一言で説明すれば失恋である。想いを寄せていた幼なじみの少女が神学者くずれと恋仲になり、その男がカタリ派にかぶれていたため、ほとんど岡惚れの八つ当たりめいた動機で修道院の門を叩いたのだった。今考えると書齋にこもりがちで閉塞的な自分から脱却したいという気持ちもあったのかも知れない。

入信し、十年にも及ぶ修養期間の中でミシェルの興味を最も引いたのはやはり異端審問という職務だった。

審問官の先人が残した記録を目にしたとき、ミシェルはその冷静さにひどく驚いた。異端裁判を起こし、異端者を磔にして炙り殺す残酷な仕事とかけ離れているように思えたのだった。

実際、異端審問官は刑の執行はせず、どころか直接死刑の宣告すらしない。異端者を世俗権力を意味する「世俗の腕」に委ね、彼らが火刑を実行するのである。

ただし、捕縛や訊問、拷問は行った。

その手引書である『異端審問の実務（プラクティカ）』を著したのが、トゥールーズの異端審問官だったベルナル・ギイという男である。

カルカソンの異端審問官といえばジョッフロワ・ダブリが有名だが、ミシェルはこの異端審問を一つの形式に昇華させたギイという男を尊敬してやまなかったのである。

ギイのまとめた方法論を完全に実践し、その後継者となる――それがミシェルの目標だった。

「この調査でも、結果は出す」

眩いたそのとき、一陣の風が横殴りに通過した。ぶつり、ごとりと何かがちぎれて転がる音が

後ろから聴こえる。

即座に馬を止めて振り向くと、三人いた同志の姿は二つに減っていた。

「何があった？」

ミシェルが訊ねるが早いか、ひゅんひゅんという風切音が立ち、呆然とする二人の痩せた体が腰で二分された。鮮血をしたたらせる下半身を乗せ、馬たちは狂ったようにミシェルの脇を通過して彼方へと走り去る。

黄昏の中、今度はミシェルが呆然とした。

――黒い獣が、そこにいた。

毛むくじゃらの四つ足の獣が、枝分かれした銀色の長い尾をほうきのように逆立て、こちらを眺めている。爛々と輝く赤い眼。耳まで裂けた口。鮮血で塗れた爪を、掌を上にしてべろりとなめた。

「異端狩り――神の犬か」

ミシェルの服装を見て、獣はそう言った。

喋った――笑った。

獣が言葉を発する違和感に目眩を覚える。

「人狼……」

ミシェルは思わず呟いた。

黒い怪物はなめた前脚を地に戻し、口の片端を引き上げ――身を躍らせた。

「うひゃあ！」

情けない声を上げ、ミシェルは馬上から後ろへひっくり返る。乗っていた馬の首が三枚におろされ、体が大きな音を立てて倒れた。

「……………神よ」

無意味にも思える懇願。そもそも信仰心の基礎が失恋の腹いせである。そんな信徒の継る言葉など父なる神が聞き届けてくださるはずもない。

逃れ得ぬ死を目前にし、ミシェルはごくりと唾を飲み、

「堪忍や。見逃してくれ」

必死になるあまり、故郷の訛りが出たことを気にする余裕もない。

「う、う、う」

おもむろに黒い人狼が唸って後ずさりを始め、そのまま暗い茂みへと身を翻した。

「……………え？」

ひとまず助かったと悟り、安堵のあまりミシェルの意識は闇に吸い上げられるように遠のいていったのだった。

質素なスープとパンを飲み下すと、ミシェルは旅籠を後にした。街路を右に曲がって、賑やかな目抜き通りに入るなり、はたと足を止めた。

その目は、街路の先にある典麗な大聖堂に吸い寄せられていた。ファサードから監視の目を光らせるガルグイユには、かつて夜な夜な人を襲っていたという恐ろしい逸話がある。また、この街には巨人が暴れ回ったという噂もまことしやかにされていた。

「ヴィヨンヌ……これがアヴェロワーニュか」

口に出した後で、それが昨夕に森でした眩きと同じだと気づく。

妖しい芳香と敬虔な信仰が同居する深い森。聖別されながらおぞましい怪異が息づく都市。それがアヴェロワーニュなのだ。

ミシェルがこれから赴こうとしている先はそれがことさら顕著な場所であるらしい。

【魔導街区（カルチェ・マレフィキウム）】——大聖堂の裏通りを複雑に進んだところの街区はそんな呼ばれ方をしていた。鬱蒼とした森に直面する城壁の内側に位置するこの界隈にいかがわしい魔導師が無数に犇めいていたことがその由来だそうだが、そんな魔の隆盛も百年ほど前に途絶えて久しいという。

「さて、どこをどう行ったものか」

懐から折り畳んだ紙を取り出す。

マリーから渡された【魔導街区】の案内図である。巷を騒がす人狼らしき何者かに襲われた際の記憶を取り戻したミシェルに、赤い帽子の少女はここへの来訪を勧めた。

「どうしてそんなところに行かなきゃなんないのか、って？ 君ってば命の恩人にお礼を言いたくないの？」

つまり、傷つき、失神したミシェルを見つけてヴィヨンヌに運んだのはマリーではないというのだ。

「あたし一人で大の男四人を運ぶなんて、とてもじゃないけど無理よお」

にこにこと言う。四人？ と訊ね返すと、

「それもここに行けばわかるってば。何ならその黒い人狼の正体もわかるかもよ」

唐突に言われて困惑するミシェルをよそに、マリーはどこからか出した紙にペンを走らせながら、【魔導街区】の住人についてまくし立てるように語り始めたのだった。

示された順路で進むと、三階建ての壁木建築が左右に並ぶ通りに入った。

目の当たりにしてみると、なるほど森に比べたら妖しげな雰囲気はないようだった。どころか街並みは表通りよりも新しく、清潔感すら感じられた。

「まずは、と。確かリュク・ル・シヨドロニエだったな」

それがマリーいわく命の恩人の名だった。そのル・シヨドロニエという男は降霊術と錬金術、そして指輪の魔術に通じているという。

彼が倒れたミシェルを見つけたのは、ちょうど入れ替わるようにヴィヨンヌからペリゴンの大修道院に向かっていたからだった。何でも最近の星辰に凶兆を見たため、過去の記録を調べよう

とあの図書室に赴く途中だったそうだ。

そんな魔導師の住処といえば、街路の左手奥から三つ目の何の変哲もない民家である。

「本当にこんなところに？」

疑念を払えないまま戸を叩く。

返事はない。何度か試みるが、やはり応答はなかった。

おそらくペリゴンに再度向かったのだろう。自分のために二度手間を取らせたことも併せて詫びなければなるまいが、とりあえず礼はまたの機会にするとしよう。ミシェルは地図を眺めて次の家を探す。

「んああ、どうもこんちは」

とぼけた口調で戸を開いたのは長身瘦躯の男だった。

ナジエというこの男も魔導師だそうだ。【魔導街区】にやって来てからまだ日が浅いが、かつてアヴェロワーニュを恐怖の淵に陥れた屍肉の巨人を創り出した魔導師の孫弟子だという。

人狼らしき獣に襲われた経緯とマリーという少女のことを手短かに伝えると、ナジエは深くうなずいた。

「なーるほど、あれの紹介ですかい。なら邪険にゃ扱えねえわな。下手に追い返してあれ自身に出張られでもしたらたまったもんじゃあねえ」

首をすくめて茶化すが、その右手は微かに震えていた。どうやらこの男は本心からマリーを恐れているらしい。

「あれがおいらんところに行ってみろつつたのは、旦那を襲った真っ黒い獣めいたモンがいるからでしょうよ。まったく、違えてわかってる癖に嫌がらせしゃがる。ま、とにかく入ってくださいえよってんだ」

口を尖らせたナジエに招き入れられ、ミシェルは啞然とした。

ナジエの居宅は一つの大きな空間だった。二・三階の床が取り払われて吹き抜けになっており、天井には採光窓、壁面に螺旋階段が設置されている。

さらに驚いたのは、外観と異なるその内部以上にそこにいるモノの姿だった。

「そいつはグラングジエ。愚息でさあ」

全裸の青年が立っていた。均整が取れてよく引き締まった肉体。掘りが深く、細い顎の端正な顔立ち。肩より長い波打つ髪は輝かしい銀――いや、天井の窓から降り注ぐ陽光で七色に照り映える瑠璃の色だ。

だが、それすらも小さな異様だった。

「ほれ、ちゃんと挨拶しなさい」

吹き抜けの二階辺りにある顔を見上げてナジエは言う。

「ぐう、おおお……」

四トワーズ（およそ八メートル）上から唸り声が響く。

そう、グラングジエは巨人だった。

その大きさとギリシャ彫刻のような美しさに、ミシェルは圧倒されて言葉を失う。

「このグラングジエが、あっしのところの黒い獣ってワケでさ。確かに生まれたては黒くてデカ

い毛玉だったんですが、でっかくなるにつれてぼーぼーだったオケケもどんどん抜けてっちまった。つっても、これでもまだ幼児の段階。成長期真っ盛りなんですぜ」

グラングジエはまともな言葉を発せないようだったが、その深緑のまなざしには理性が宿っている。これは違う、とミシェルは確信する。あの黒い人狼には、知性はあったが理性はなかった。

「たく、あれは何を企んでんだか。旦那も気をつけた方がいいですよ。あんたは全くもってフツ一の人間なんだから、あんなに付き合ったらすぐに頭がイカレちまいますぜ」

と、ナジエは別れ際に忠告をした。

あの少女がそこまで悪く言われるのはなぜだろうと首を傾げる一方で、普通の人間と言われたことに無性に腹立たしさを覚えながら、ミシェルは次の訪問先に向かう。

次はヴェルミクルスの通り名を持つ魔導師だった。朱の虫という意味らしい。

マリーには戸口をくぐるのにも呻吟するほどの肥満体の中年男と聞かされていたが、出てきたのは二十四、五の艶やかな女だった。

「確かに俺がヴェルミクルスだが」

女の声で男言葉を使う。本人によると彼は様々な虫を意のままに操る魔導師で、南の大陸奥地で見つけた新種の寄生虫を自分の体で試してみたところこのような体質の変化が起きたそうだった。

面食らいながらミシェルが人狼の話題を持ち出すと、

「ふむ。人狼というのは毛むくじゃらで素早く動き、獲物を切り刻んで喰らうモノだ——と、このくらいのことしか知らない。俺は多足か触手が専門で獣にはあまり興味がないものでな。そいつの体から採取したノミかダニでもあるんなら話は別なんだが……」

「ありませんね」

申し訳なさそうにミシェルが答えると、仄かな期待を目に浮かべていたヴェルミクルスはがっくりと肩を落とした。

「そうか……じゃあ俺は力になれそうにないな。悪いが話はここまでだ。しばらく前から星辰に吉兆が出ていてな。手の込んだ準備をする必要があるもんでな」

「吉兆？ ル・ショドロニエという方は凶兆と言っていたんですけど」

「それは捉えようの違いだな。ル・ショドロニエはこの街のお抱え魔導師——つまりはこの世界の安定保持を第一に考えている。俺はそうじゃない。俺が目に向け、腕を伸ばすのは別世界（オートル・モンド）だからな」

「別の世界とは？」

「この世と地続きならざるところだよ。星辰はそこからの来訪者を示しているんだ」

ル・ショドロニエはそれを恐れ、ヴェルミクルスは待望しているということらしい。

「それにしても難儀だな。君のような凡夫がこんなことに深く足を踏み入れるだなんて。ひどい死に方をすることになるぞ」

女体化魔導師にもため息交じりにそう言われ、ミシェルは慚然としながら地図を開く。

ククという豊かな金髪のは、名前の通りカッコウを模した仮面を被っていた。

「あらかじめ言っておくけど、僕は魔導師じゃあないよ」

開口一番そう言った。

「僕が磨いているのは〈遊びの術（アール・ダグレマン）〉の腕なのさ」

「つまり、あなたは遊び人ということですか」

「有り体に言えばそうだけど、すごく誤解されそうだからちょっと説明させてもらおうかな。〈遊びの術〉は妖術じゃなくて奇術の類なんだ。古今東西の遊戯を基にこの僕が考案する奇術さ」

「遊戯とは、タブラや石投げ遊びのような？」

「そうさ。参考までに聞いておくけど、君は他にどんな遊びを知っているのかな？」

ミシェルは答えに困った。入信してからこの十年、遊戯に興じた記憶などなかったからだ。

「子どもの頃ならば、まあだだよやブリ・ブリ・ズーなどをよくやっていましたね」

「ブリ・ブリ・ズーだって？ するともしや、君の田舎はラングドックなのかい？」

「ええ。生まれはカルカソンヌですが」

「やっぱり。ブリ・ブリ・ズーはラングドックで広く伝承されてる遊びだからね。カルカソンヌかあ。行ったことないけど良い街だって聞いているよ」

ククは興奮し始める。

「古代ローマからの城塞都市。都市、街道、草原か……うん、何だか新しい遊びが浮かびそうだぞ。いいモチーフをくれたね！」

手を握ってぶんぶん振り、

「ありがと。それじゃ」

と言って戸を閉めようとするのを、ミシェルは慌てて止めた。

「人狼について教えてくれって？ あれは一種の呪いだよ。人に獣を憑かせる森の呪いさ」

「魔導師でないのによくご存じですね」

「ま、遊びも呪いの要素を含んでるからね。運は時とともに移ろいゆくもの。ここだけの話、〈遊びの術〉にはかけられた呪いを他者へ転移させる術もあるんだ。その代償として僕は永久の寝取られ男（クク）の汚名を着ることになったんだけどね」

よくわからないことを言っておどけた身振りをしてみせた。

話が済み、ミシェルが辞去しようとする、閉じかけた戸が再度開き、

「あ、一つくらいは得意な遊びを作っといた方がいいよ。君ってば、欠点はないけど何の取り柄もないつまらない人間だからさ」

ここでも同じことを言われてしまった。住人の間で口裏を合わせてからかっているのかと疑いながら、次の行き先を確かめる。

最後は【魔導街区】の入り口近くの医院だった。看板はかけられていないが、戸外にまで患者が溢れていたため所在はすぐにわかった。病人が列をなしているはずなのにやたらと賑やかなのは、壁に備え付けられた長椅子に座って待つのは女がほとんどだからだ。妊婦と軽傷の怪我人がちょうど半々といったところである。

何でも、この医者は奇跡と呼ばれる治療を施しているそうだ。

様子を窺おうと側壁の窓から中を覗く。小さな刃物を振るう医者らしき者の姿が見えた。腹部

に手を入れて処置を施し、傷口を縫い合わせている。

かと思うと、素早く石鹼と湯で手を洗って隣の寝台でうつ伏せになっている患者の背に細い針を刺し始める。一本や二本ではなく、数十本もの針が立っていた。何をやっているかは皆目検討もつかなかったが、その手並みは一貫して鮮やかで、一切の迷いがなかった。

と、次の瞬間、ミシェルは目をみはった。

数十本の針の尻から、黒みを帯びた陽炎のような気体が立ち上がり始めた。

煙だろうか――いや、燃えているようには見えない。空間に滲み出すようだった。

固唾を呑んで覗いていると、立ち上った気体はゆっくりと医者の方へ流れていった。医者が左の袖を捲ると、手首にはまっていた赤錆びた鉄の腕輪が気体を吸い込んでいく。表面に浮いていた錆がぽろりぽろりと剥げ落ち、下から光沢のある黒が露わになった。

「あれも魔導というやつなのか……？」

思ったよりも恐怖がないのは、これまで見てきた世界とあまりに違い過ぎるためか。それとも昨夜から続く異常な精神状態のためだろうか。

その医者は、ベアトリスという三十絡みの細身の女だった。切れ長の瞳。口数は少なく、気むずかしそうな印象を受けた。

「話を聞く余裕はなさそうだな」

異端審問の職務遂行の際ならば、相手の商売などお構いなしに乗り込んでいただろう。それが気になったのは、【魔導街区】の住人のことごとくに凡人扱いをされて弱気の虫に取り憑かれたからだろうか。

ミシェルは痩せた背を少し屈め、しばらく時間を潰そうと歩き出した。

「『滅ぼすべきは（アド・アボレンダム）』」

自省の衝動に駆られ、ミシェルが呟いたのは、一一八四年に教皇ルキウス三世が発した勅令だった。カタリ派やワルドー派などを異端認定し、破門するという内容で、これによって異端審問は始まったとされている。

「一二〇六年、説教者修道会設立」

カスティール地方出身のドミニコ・デ・グスマンが結成した修道会——つまりはドミニコ会のことである。カタリ派の熱狂極まる南フランスに伝道を申し出たドミニコは、異端の教えに劣らない厳格さが必要と考えて同様の清貧生活を送るようになった。学問を盛んにするなど熱意あるその活動の結果、ドミニコは死後十三年という短い期間で聖人に列せられたのだった。

「一二〇九年よりアルビジョワ十字軍——異端カタリ派の征伐が二十年ほど続いた」

カタリ派を保護する領主を破門した教皇特使が暗殺されたことを契機とし、「すべて殺せ、神は神の者を知りたまう」の姿勢で制圧に臨んだ。結果、南フランスの異端はほぼ一掃されることとなった。

十字軍終結後のカタリ派残党は、拠り所としていたモンセギュールという山城の陥落により一二四四年に壊滅が決定的となる。

「この十字軍が収束する中で、異端審問制度を設立する教皇勅令が発された」

一二二九年、それまでは各地の司教たちが行っていた異端審問が教皇に直接任命された審問官によって行われるようになった。そして、一三二三年にはかのベルナルド・ギイが『異端審問の実務（プラクティカ）』を執筆する——このような経緯を辿って異端審問制度と方法論は確立していったのだが、ミシェル・カルパンティエが審問官となったこの時代の異端状況はといえば、めぼしい活動はほとんどなかった。

そんな中、ミシェルはあら探しのような仕事に邁進し、教会内部ではそれなりに評価される立場となった。しかし、こうして職権が通じない場に飛び出してみると、これまでの己がひどくせせこましい生き方をしているように思えてきてならなかった。

【魔導街区】の住人たちの言葉に憤ったのも、それが的を射ていたからに他ならない。

ミシェルは立ち止まり、

「私は何がしたいのだろう」

うつむきがちに、ずっと胸の内に秘めていた思いを吐露した。

一切の私財を持つことを許されない托鉢修道士でありながら、ここにきてようやく心から丸裸になった気分になる。

立ち尽くすミシエルの目に、ふと地面に伸びる人影が映った。

「なあ。ちょっと訊いていいか？」

顔を上げると、二十歳頃の青年が立っていた。短く逆立った髪。燃えるような眉。瞳は青くつぶらで、口元には不敵な笑みが浮かんでいる。

「あんたさ、もしかして人狼に襲われたって坊さんじゃないか？」

胸元で何かが光った。月長石がはめられた革の首輪を着けている。

「どうしてそれを？」

「風の噂だ。ちょっと失礼させてもらうよ」

青年は無造作に近寄り、くんかくんかとミシエルの体のあちこちを嗅ぎ、

「んんん、こりゃくさいな！」

そう言って顔をしかめた。

「な……」

「くさいんだよ。でも、獣の臭いじゃない」

確かに清潔さを保っているとは言い難いが、すれ違っただけの相手に無遠慮に言われるようなことではない。本当に失礼な話だが、どうも悪気が感じられなかった。

ミシエルの困惑に構わず、青年は続ける。

「これは金物——そう、あんたに染み着いてる魔の香りは錆びた鉄みたいな臭いだ」

「何だって？」

「と言っても、本当の金物じゃないよ。ほら、鉄を引き寄せる石があるだろ？ あれみたいに目には見えない力で集められた魔の香りが、あんたからする」

「襲われたとき、体にこびりついたと？ 魔の香りとは、人狼の臭いのことですか？」

「違う。人狼も魔をまとうが、そんな風に強引に集めるわけじゃない。人狼がまとうのは森が秘めた魔だ。獣への解放であり、大きな力による護りでもある。人狼の臭いは、あんたから漂ってくるような歪んだ香りとは全く違う」

「ちょ、ちょっと待ってください。さっきから何を言っているんですか？ そもそも君は誰なんだ？」

「決まってるだろう。あんたを襲ったのは人狼なんかじゃないって話さ」

「人狼じゃ……ない？」

「それと、俺はギイだ」

付け加える。名乗ったのだ。それもミシエルが目標とする異端審問官と同じ名前だった。

「ギイ……さん。あれが人狼じゃないとすれば、一体何なのですか？」

「それはわからないな」

あっさりと言い切る。

「か、からかっているんですか」

「からかってなんかいない。単に興味が失せたってだけさ。俺があんたに会いに来たのは人狼と遭遇したって聞いたからだ。そうじゃないってわかったのなら用はないさ」

あの黒い獣が人狼でないとわかったからということか。釈然としないところはあるが、ミシエルは何となく納得した。

「あのマリーって子にも、からかわれてしまったのかなあ」

ミシエルの独り言に、ギイが顔色を変える。

「——今、何と？」

途端に、恐ろしい気配が辺りに広がった。

ギイの姿が一瞬消えたかと思うと、目の前に現れて肩を掴んできた。

「マリーと言ったな。それは赤ずきんのマリーのことか？」

何だこれは。身がすくむのをミシェルは感じた。すさまじい圧迫感。目の前にいるのは一体何なのだ。総毛立って震えが走る。

「答えろ、坊さん」

みしり、と肩の骨が軋む音が響いた。

殺される――ミシェルが思ったそのとき、

「あら、狼さん」

場の空気を全く無視したのんきな声が上がった。

「久しぶりじゃないの、ビスクラヴレット。脱魔化された森の申し子たる人狼さん」

ビスクラヴレット――思い当たったのは、『レー』にあったブルトン語での人狼の呼び方だ。

「噂をすればマリー・ド・フランスじゃないか。この魔女め」

「あれれ。狼さんってばずいぶん威勢がいいけど、もしかしていつぞやの決着をここで着けたいの？ まあ、私は構わないけど。いつでもあなたに`質問、する準備はできてるんだから。お声のこと、お耳のこと、それにお口のこと――答える覚悟、あなたにできているのかしら？」

マリーはにこやかな顔で挑発する。

「…………ちっ」

舌打ちを残し、ギイは裏通りの奥へと姿を消した。

「い、今の男は一体何だったんですか？ まさか、彼が本物の……？」

「ふふふ。そうよ、彼ってばブルターニュはブロセリアンドの森で生まれた正真正銘の人狼なの」

「もしかして、彼がああ黒い怪物の正体？」

「それはどうかな」

はぐらかすので、ミシェルはいい加減一矢報いてやろうと思いついた。

「……君がああ『レー』を書いたマリー・ド・フランスだと言っていた」

マリー自身について訊ねてみる。

だが、それは大きな間違いだった。

「ええ。私はマリー。フランス生まれよ」

答えた刹那、その目が真紅に染まったように見えた。

ミシェルは強い熱気を肌で感じた。全身が焼け爛れる錯覚に包まれる――いや、それは錯覚ではなかった。ミシェルは燃えていたのだ。

「ぎ……あ……っ」

叫ぼうとしたが声が出ない。息が吸えない。吐けもしなかった。

苦しきのあまり、ミシェルは無様に地面を転げ回る。

目の前が赤で塗り潰される。何をした――何をされた？ 全く理解できない。

そこで、ようやくミシェルは実感した。ギイや【魔導街区】の住人が彼女を恐れる理由を。

「あたしのこと、わかった？」

ふと、身を焦がす熱気が引いていく。マリーの瞳も赤から黒に戻っていた。おそらく、ほんの短い時間のことだったのだろう。しかしミシェルにとっては恐ろしく長く感じられた。

「君ってばびっくりするほど普通の人だから、このくらいわかりやすくしないと通じないでしょ？ それなりの魔導持ちの子たちってば、あたしとまともに話そうともしてくれないのよね。だから、君みたいに話せる子とは大事に付き合っていきたいんだ」

だから深く詮索するな、と言っている。

ナジエの言っていた通り、マリーには何らかの企みがあり、自分はその中で何らかの役割を割り振られているのだ。役割の筋書きからの逸脱は許さないと釘を刺してきたのだ。

今度はただひたすら恐怖に震えた。いや、胸の奥からこみ上げてくるこの感情は、恐怖ではなく畏怖だ。人知の及ばぬ力を持つ存在――神への畏れだった。

どうしてこんな少女に、それを感じるのだ。

「――さて、行こうか」

「どこに？」

「ベアトリス先生のところよ。あたしがここに来たのは、君の大切なものを彼女に預けたのを伝え忘れてたからなの」

大切なものとやらの思い当りはなかったが、ミシエルの足は本人の意思に関係なく歩き出したマリーの後を追う。

ベアトリスの医院を再訪すると、昼を過ぎたからか、先ほどまでの盛況さは収まっていた。

「こんにちは、ベアトリス先生」

マリーのにこやかな挨拶に、女医は無愛想な態度で応じる。

「……来たか。思ったより早かったな」

「あら、まだ終わってなかったりする？」

「いや、済んでるよ。案内するから少し待て」

ベアトリスは白衣を脱ぐ。露わになった左手首に、黒い気体を吸い込んだ腕輪が鈍く光っていた。

「瘴気（ミアズマ）よ」

マリーが声をひそめて言った。

「え？」

「ベアトリス先生の奇跡の治療、見たんでしょ？ 患者さんから出たのは、体に溜まった毒気――瘴気なの」

にわかに信じ難いが、このアヴェロワーニューではそれがあつた話なのだとミシエルはすでに悟っていた。

むしろ気になるのは、ベアトリスがそれを吸っていた理由だ。なぜあんなことを――と訊ねる時間はなかった。

「ベアトリス先生ってば、若い頃にあちこち放浪しててね。サレルノで外科医のイロハを身に着けたんだって。もちろん、【魔導街区】の住人だからただのお医者さんじゃないわよ。医術の他にも気配を消して屋敷に侵入する術だとか、暗殺術や投毒術、めくらましのまじないの心得もあ

るのよね？」

いつの間にか着替えを済ませていたベアトリスに問う。

「ああ」

静かにうなづくが、どこから聞いていたのだろう。覗いていた話を聞かれていたらと考えるとミシェルは気が気でなかった。

「無駄話はその辺りでいいだろう。行くぞ、奥の部屋だ」

ベアトリスはくるりときびすを返して歩き出す。

その痩せた背中を見ながら、マリーはまた小声で言う。

「ベアトリス先生ってば女しか看ないの。たとえ子どもでも、男は絶対に看ないんだ」

「でも、さっきは男も列んでいましたよ」

「そっちは助手の担当」

どうやら一人でこの医院を切り盛りしているわけではないらしい。

「で、私は何を受け取ればいいのですか？」

廊下を進みながら訊ねる。

「君のお友達だよ」

マリーはいたずらっぽい微笑で答えた。

廊下の突き当たりの扉をベアトリスが開く。

中に入ると、独特の臭気が鼻を突いた。薬品の香りの中に混じる微かに粘りつくような生臭さは――。

屠殺場に漂う臭いに似ている。ぼんやりと思い浮かべ、一瞬後にぞっとした。

「もしかして、ここは……」

陰気な一室を見渡すと、中央に黒い作業台が一つ、左の壁際に三つの台が並んでいる。奥壁には暖炉があり、それを取り囲むようにずらりとかけられた調度は、大小様々な刃物や言い表しにくい形状をした器具だった。

中でも一際目を引く一品――それはおそらく剣だと思われた。

柄があり、鞘らしき物に納められている。しかし直線的で太い形状ではなく、それは緩やかな山なりの曲線を描いていた。

「東の果ての島国で作られた剣よ。細身で柔らかいけどよく斬れるの。まるで魔性が宿っているかのようにね」

マリーの微笑に何かが含まれたように思えたそのとき、作業台の一部が動いた。人影が揺らぐ――ミシェルは全く気づかなかったが、作業台に向かう者がいたのだった。

「さっき言った助手よ」

白い上衣をまとった何者かは一心不乱に手を動かしている。その背中が驚くほど小さい。

「子ども？」

ミシエルの眩きを耳にし、動きが止まる。

「……………」

無言で振り返り、頭と口元を覆っていた布を外す。長い黒髪がかかって素顔はよくわからなか

ったが、目は大きく、瞳も髪と同じ黒色なのはわかった。白衣の下にはスカートを穿いている。

「こんにちは、フォコンちゃん」

それは、気軽に声をかけるマリーと似た年頃の少女だった。

フォコンという名のその少女は何も言わずにマリーとミシェルを一瞥し、左壁の三つの作業台に移動する。

フォコンが布を剥ぎ取ると、そこには三人の男の遺体が並べられていた。

「おお。兄弟ジェローム……アンリ、ロラン」

ミシェルが嗚咽を漏らしたのは、それが共に南フランスから任を帯びてきた同志だったからだ。のみならず、ずたずたに切断されて無惨な肉の欠片と化したはずのその姿は、指の一本も欠けることなく生前とほとんど変わらない状態だった。

生きているのではないか。そんなあり得ない期待を抱き、間近に寄って観察すると、切断や縫合の痕跡がうっすらとあった。

「これは、君がつなげたのか？」

訊ねると、フォコンはこくりと頷いた。

年端のいかない少女がこのような技術を持っていることに、ミシェルは絶句する。

「先生の仕込みがいいのよね」

マリーは満面の笑顔で無表情なフォコンの頭をなで、腕を組んで壁に寄りかかっているベアトリスを見た。

「それに、あっちの方の腕もどンドン上がってるみたいじゃない」

その視線を中央の作業台に移すのに、釣られてミシェルも目を向けると、

「……何ですか、あれ」

台の上に置かれた仰向けの死体を見て、ミシェルは声を裏返す。

それは人の死体ではなかった。手足は人のように伸び、硬い毛で覆われている。熊に近いが、頭は鱗だらけの蜥蜴のものだった。見たことのない生き物——その胸から下腹部にかけて、大きく切り開かれている。

そこで行われていたのは、修復とは反対の作業だった。解体——奇怪な生物の身体構造を確かめていたらしい。

「フォコンちゃんってば、巷を賑わす黒い人狼をやっつける方法を調べてるんだよ」

何を言っているのか。ミシェルはマリーの言葉がしばらく理解できなかった。やっつけるとは、あのおぞましい怪物をか？　こんな少女が？

「どうしてそんなことを？」

「うーん……どうして？」

ミシエルの投げかけた疑問を、マリーはそのままベアトリスに渡す。

「人に仇なす魔を滅殺する。それがその子の宿命だからだ」

ベアトリスはおそらく明瞭簡潔に答えたのだろうが、突拍子もなさ過ぎて全く理解ができない。

「もうちょっと詳しく説明してあげたら？」

マリーに言われ、ベアトリスは不機嫌そうな表情で口を開く。

「八年前、プラハでのことだ」

雨に濡れた裏路地で、ベアトリスはどこぞの魔導師の使わした魔物に襲われていた老いた東洋人の僧侶と子どもの二人を助けた。

カイソンと名乗った男は深手を負っており、長くは保たなかった。その遺言として、ベアトリスは二人の身の上話を聞くことになった。

連れていた幼子にはるか東方の英雄の子孫であり、その家が没落した後は長い流離の旅暮らしを余儀なくしていたのだそうだ。

「この子を一人前に仕上げたい——そう言い残して、カイソンは死んだ。それがフォコンだ」

「あの剣も、そのとき渡された物なのよね？」

「ああ。何でも斬った魔物の力を奪うことができるそうだ」

「じゃあ、もし神様を斬ったらどうなるのかしらね？ どう思う、ミシェルくん」

マリーからの唐突な一言に、ミシェルは目を丸くする。神を斬るだと？ どうしたらそんな発想ができるのか。驚きのあまり言葉も出ない。

「だって、神様も魔物も同じようなものじゃない」

異端じみたことを言うのは自分をからかっているからだとわかりながら、ミシェルは苦い顔をして聞き流すしかなかった。

「さてミシェル君。ボサッとしてないでお友達を安らかに眠れる場所に連れて行ってあげたらどう？」

「と言われても……私一人で、ですか？」

「遺体安置所まで案内してくれるそうよ」

マリーはフォコンに歩み寄り、その肩をぽんと叩く。

「……………よろしく」

挨拶のつもりか、フォコンは体を折って深々と頭を下げた。

その背には、なぜか壁にかかっていた湾刀が括り付けられていた。

「モンセギュール？ 今、モンセギュールと言いましたか？」

ミシェルが声を裏返したのは、大聖堂の裏手にある遺体安置所に同志三人の亡骸を納めているときにフォコンの口から出た医院の名に聞き覚えがあったからだ。

「……静かに。死者が起きてしまう」

フォコンは口元に指を当てて注意をする。

外に出てからミシェルは改めて口を開いた。

「君の先生は、なぜカタリ派の本拠地の名を付けたのですか？」

「……`安全な山（モンセギュール）、。つまり傷病に苦しむ者たちの安らげる場所という意味」

「意味は通じますけど、あえてその名を使う意図は？」

「……ボクにはわからない。でも、先生はカタリ派の完徳女（ペルフェクティ）で、モンセギュールの生き残りだったと聞いたことはある」

吹き込んだのが誰かは聞くまでもない。マリーだろう。

しかし、ベアトリスが完徳女であるはずがない。フォコンはわかっていないのだ。モンセギュールの生き残りがどういう意味であるかを。

清浄（カタロス）が語源といわれるカタリ派は、現世は悪が作ったものであり肉体は善なる魂を捕らえる牢獄と考え、肉欲と肉食と殺生を忌避する悲観的・虚無的な信仰だった。

その信徒は大半の市井の者と一部の徹底的な禁欲生活を送る完徳者（ペルフェクティ）に分かれており、腐敗した教会への反発もあって南フランス・ラングドック地方で強く支持されていたが、あまりにも熱狂的な広がりをおそれた教会が派遣した十字軍によって壊滅させられることとなった。

その残党がモンセギュールと呼ばれた山城に立て籠もったが、それも一二四四年に制圧される。

「百二十年前のことだ。赤子だったとしても生きているはずがない」

「……そうなのか？ ボクを育ててくれたカイソンは二百年前のひいひいじいさんの頃から我が家に仕えていたし、ヴェルミクルスも十字軍を経験したと言っていたぞ」

この少女、すさまじい知識や技術を持つ反面、常識がすっぽりと抜け落ちているらしい。

どう説明したものか――思案しかけたところで、この地の異端調査が己の使命だったことを思い出す。思い出すが、何をしようとも思えなくなっていた。職務への意欲が全くない。意識のその部分だけがぽっかりと抜け落ちてしまったかのようにだった。

「じゃあ、あの腕輪は？」

「……あれは、そのモンセギュールで拾った物で、ずっと昔に空から落ちてきた鉄でできているそうだ」

「空から？ 星が降ってきた――奇跡を起こす星の欠片……？」

「……患者の病を癒して、先生も元気になる。一石二鳥」

「それはそうだけど、それでいいのかなあ」

釈然とせずにミシェルが首を傾げていると、

「おい、坊さん」

と、声をかける者があった。

「ギイ……」

現れたのは、ミシエルの目標とする人物と同じ名の青年だった。

「もう一度訊くぞ。あんたを襲った怪物は、本当に人狼じゃなかったんだな？」

「……おそらく、違うと思います」

「ほう。理由を聞かせてくれるか？」

「人狼は獲物を引き裂いて喰らうと聞きました。けれど、私の兄弟の体は、引き裂かれはしたが喰われてはいない。噛まれた痕跡すらありません」

「なるほど」

ギイは深くうなづく。

「やはり空振りだったか。何度も手間をかけて悪かったな」

残念そうに言い、去ろうとする。その瞬間、

「……人狼」

傍らのフォコンがやおら飛び出した。

「覚悟」

と発し、背負った湾刀を抜き放つ。

「何だ、おまえは」

振り下ろされる刃をひらりとかわすギイに、フォコンは追い討ちをかける。

横薙ぎ、斬り下ろし、突き。流れるような一つづりの動作で迫るも、ギイはさして焦る様子もなくその全てをかわす。

――かに見えたが、

「何だと……？」

ギイの胸元が裂け、横一文字の傷が浮かぶ。

続く右下からの斬り上げを、大きく退がって回避する。

ぽとり、とギイの左手小指と薬指が落ちた。

斬り上げたはずのフォコンの一撃は、まっすぐの突きだった。それに反応して防御に出したギイの手指が切断されたのだった。

「ち。めくらましを使うかよ。しかもその剣……俺たちをぶった斬るための物か」

ギイの歯噛みする様子から、フォコンが何らかの術を使ったことがわかった。

「やってくれるじゃないか」

飄々としていた雰囲気途端に一変し、全身に怒りが満ちていく。

「〈驚異のベルト〉――」

首元で輝く月長石を掴む。と思うや、強引に首輪ごと引きちぎってそのままへソの辺りに押しつけた。

「そんなに人狼が恋しいってんなら……」

ちぎれたベルトがしゅるりと伸長し、生命を与えられたかの如くギイの腰に巻き付く。

「望み通り、遭わせてやる」

バックル部分へと移った月長石から白銀光が放射された。

目映い光の中で、影となったギイの全身が変貌していく。

体が一回り大きくなり、ごわごわとした獣毛が生えて耳が尖る。

おおおんーと、前に突出した口から遠吠えが上がり、光が散じた。

「これが人狼……」

ミシェルが驚きの声を漏らす。

確かに狼ーだが、獣らしさは微塵もない。

そこに直立していたのは、人と狼の要素を兼ね備えた灰色の何者かだ。獣毛のような意匠が凝らされたローブをまとい、狼をモチーフにした紋章めいた仮面を被った男だった。

「そうだ。俺の田舎じゃ、このベルト自体をビスクラレットって呼ぶこともある」

彫像のように無機質だが、捉えどころのない神秘さを感じさせる佇まい。怪物どころか、神官のように荘厳な姿から、ギイの声が発された。

「行くぜ、小僧」

人狼は両手の爪を刃のように伸ばし、地を蹴った。

「……虚仮威し」

フォコンは無言で迎え撃つ。閃く爪を湾刀で受け流し、外回りの踏み込みで回転斬りを試みた

。ー一刃は空を薙ぐ。

「めくらましにはめくらまし、だ」

腹の月長石が仄かな銀光をたたえているのがわかった。意趣返しに術を使ったのだ。

頭上から降り注ぐ攻めに、フォコンは小さな体をさらに縮めた。

「だめだ、逃げろ！」

思わず身を乗り出したミシエルの目に、守りに入ったフォコンの口から幾筋かの光が走るのが映った。

「ちいっ」

有利に見えたギイが何かを振り払う仕草をし、着地するなり距離を取る。

「ふん」

鼻を鳴らすギイの腕ー二本の指が欠けたままの左腕に、数本の針が刺さっている。ベアトリスが使っていたのと同じ銀の針だ。

ギイは手を何度か握っては開く。

「動きが鈍くなった……何だこれは？ 味な真似をしてくれる」

そして針を全て抜き、

「――ま、所詮は小細工だ」

吐き捨てる。

「そろそろ本物の驚異を見せてやる」

再び月長石が光る。ギイの体が左右に揺れたかと思うと三つに増えた。三体の人狼が同時に攻め、

「……全部斬ればいいだけ」

フォコンもまた攻めの姿勢を取った。

熾烈さをいや増しながら繰り広げられる攻めの応酬を眺めて、全く意味のない無益なものだとミシェルは思う。

そう思ったが、しかし声が出ない。驚嘆のあまり出せない。

鬼神すら踏み入れられない状況のそのとき、

どんーと、大きな音と共に街の一角から黒煙が噴き上がった。

「何だ何だ？」

ギイが目を丸くする。

「あれって、【魔導街区】の方ですよね」

ミシエルの言葉に、フォコンが顔色を変える。

「ば、化け物だ！」

大通りから悲鳴が上がる。

「黒い獣が出た。モンセギュールの辺りだ！」

ざわめきを聞きつけ、

「……っ！」

フォコンは口惜しげにギイを見るも、すぐに身を翻した。

「いきなり斬りかかってきたかと思えばトンズラか。勝手なやつだな」

ギイが呆れ顔で言う。

「坊さん。俺達も行くぞ」

「え？」

有無を言わずミシエルの襟首を掴み、ギイは駆け出した。

あっという間に【魔導街区】に到着すると、モンセギュールの医院は半壊していた。

立ち込める埃の中から現れたのは、あの黒く巨大な獣の姿だった。

まだ明るさが残っている。その姿ははっきりと見えた。

足下がふらつくような錯覚に陥った。このような忌まわしくも冒瀆的な存在をどうして人狼だと思ったのか。

四足獣だが、艶のない剛毛に覆われた背中には亀の甲羅に似た平たく硬質な瘤がのぞき、それを取り巻くようにミミズのような銀色の触手が十本あまり生えていた。触手群の先端は尖った刃のように鋭い。これが三人の同志を寸断したものの正体だった。

このような怪物を前にして異端審問が何の意味を持つのだろう。信仰の細かな差違をつつき、異端と断じて彼らの魂を貶めて何をいい気になっていたのだろう。

あれに対抗するには、同じ魔の力に頼るしかない。

「そうだ、魔導師は？」

あの奇天烈な住人達ならば何とかしてくれるのではないか。

ミシェルは街路を見渡すが、どの門戸も開く様子は全くない。

黒い獣が尾を振るう。柔らかくしなりながら伸びたかと思うと、ぐるりと旋回を始めた。

刃の渦が急激に押し広げられ、居並ぶ家々を切り刻む。

――いや、空を掻いた。

「何ですか、今のは？」

ミシエルの目には、家が避けたように見えた。身をねじってかわすように、街区の一部がぐにゃりと歪み、銀色の渦から遠ざかった。

「魔導師ども。自分の城を守るのが第一のようだな」

ギイが半ば呆れ顔で言う。

「だが、街の中心部からは隔離したようだ」

「被害を広げないために？」

「それもあるだろうけど――ま、俺達が来たからだろうな」

ミシェルはギイの言う俺達に自分が含まれていないことをすぐに理解した。

「……よくもモンセギュールを」

フォコンが怪物に飛びかかる。

刃を振るい、見る間に黒い瘴気の体を削いでいく。あの魔を滅ぼす剣が効いている。人狼の指を斬ったため、その力を得たのだろうか。

「俺とやったときより動きが滑らかだな」

「それはそうですよ。あの子はあの怪物を倒すために準備をしていたのですから」

「のようだな。しかし、あそこまで完璧に動きを捉えてるのはむしろ不自然だ。あの子に仕込んだ人物がいるんなら、そいつはよっぽどあの黒いののことを熟知してる。見事なまでの天敵っぷりだ」

「熟知……」

ミシェルは強い違和感を覚えた。魔を滅ぼすのがフォコンの宿命だと聞いた。あの少女がその方法を身に着けているのはおかしいことではないが、初めて戦うはずの黒い獣に完璧に対処できているのはどうも妙だ。

熟知した人物が、それを仕込んだ。

「まさか」

答えを出すのは難しくなかった。

昨晚、あの獣が自分のことを神の犬（ドミニ・カニス）と呼んだこと。あのとき突然逃げ出したのも、ラングドック訛りを耳にして理性が引き戻されたに違いない。

フォコンの横薙ぎ一閃。触手ごと怪物の本体が断ち切られ、全裸のベアトリスが垣間見える。

「……先生？」

異形のヴェールの奥に隠された秘密を見て、フォコンの無表情が初めて崩れる。

狼狽して動きを止める少女を、再生した尾の刃が襲った。

「やれやれ」

間に入り、それを止めたのはギイだった。

「あの赤ずきんにまんまとハメられたぜ」

つまらないことに巻き込まれたと嘆息し、一吼えしてベアトリスを弾き飛ばす。

ベアトリスの体を腕輪の金属が侵蝕している。

ギイの物が〈驚異のベルト〉ならば、さしづめ〈奇跡の腕輪〉といったところか。

獣毛の中にベアトリスが埋もれる。

人狼の爪が閃き、再び黒い獣を寸断――しかし、速やかに再生する。

「高濃度の瘴気で体を作っている」

刃こぼれした爪を見て、ギイは齒噛みする。

「カタリ派――現世を悪だと思なしているからこそ、瘴気を味方につけられるのか」

ミシェルにはわかる。肉体を悪とするからこそ、それを蝕む瘴気を聖なるものとして扱っているのだろう。瘴気で他者を遠ざけ、それでも近寄る者は枝分かれした金属の尾が寸断するのだ。

三つに分身したギイ全員を、ベアトリスの銀の尾が貫く。

「なるほど、おまえも俺と同じまとう者か。道具はベルトと腕輪、まとうものも森の妖気と瘴気――多少の違いはあるが、俺たちは似た者同士だな」

陽炎のように揺らぎながら、ギイの分身はさらに倍増した。六人のギイの爪が引き裂き、牙が食い込む――が、その全てが再度貫かれた。

「残念だ。もう少し早く会えてたら、友達になれたかもしれなかったな」

十人を超えるギイが攻め、また銀の尾に貫かれ、断ち切られ――これを繰り返し、とうとう人狼が百人を超えた。街路も建物の屋根までもがギイで埋め尽くされる。

ベアトリスの尾も枝分かれしていくが、人狼の増殖には追いつけていない。間断のない攻撃が再生の速さも凌駕し、とうとうベアトリスは身動きができないほどの痛手を受けた。

ぎゃあぎゃあと耳障りな奇音を全身から発するのを耳にし、

「そうか、苦しいか――安心しろ、一片も残さず喰い尽くしてやるから」

百個の月長石が強い輝きを放つ。冷たい銀光は否応なく死を想起させた。

「……待て」

恐るべき力を発現させようとしたギイの前に、フォコンが立ちはだかった。

「……先生に、手を出すな」

「おいおい、おまえは馬鹿か。その女がどうしてこんなところで正体を見せたか、わからないのか？」

「……貴様のせいだ。貴様が先生を狙っていたからだろう」

「俺は仲間を捜していただけだ――が、きっかけになったという指摘は一理あるな。確かに、俺が現れたからそいつは正体を見せた。なぜなら俺はそいつを殺す力を持っているからだ」

「……どういうことだ？」

「おまえの先生は死にたがってるんだよ。殺されたがってる。何でかと言えば、死ねないからだ」

。刺されても焼かれても死なない。教義で自殺は禁止されてるだろうが、とにかく死ねないから殺せる力の持ち主に厄介になろうと考えたんだ」

「……勝手なことを言うな」

「そんなことはない。現に、その女は願はない小僧に化け物殺しを仕込んだ——つまりはおまえをよ」

「……ボクはそういう宿命を持って生まれたんだ。先生を死なせるためじゃない」

「んんん？ 違うだろ。自分を殺せるからこそあの女はおまえを育てたんだ」

「……それ以上の侮辱は許さない」

「やれやれ、埒が開かないな。じゃあこうしよう。おまえの先生はとっくに人をやめちまってて元には戻れない。このままだとそこら中の人間を片っ端から殺して殺して殺し尽くすようになる。それを放っておくのか？ それがおまえの宿命なのか？ 違うだろ。先生がさらに手を汚しちまう前に死なせてやるべきなんじゃないのか」

「……………」

「おまえの師匠は人か魔か。今のまま俺がやるのなら間違いなく怪物として喰われて死ぬ。けど、おまえの剣ならそれを覆せる。あの女を、人として死なせてやることができる。さあどうする？ おまえがやらないのなら俺がやるぞ」

——と、ここまでのやりとりを聞いていて、ミシェルはぼんやりとしていた。頭が緩く痺れている。怪物になる女医と、それに育てられた怪物狩りの子どもの愁嘆場に感極まっていた。

だが、一方でひどく冷めてもいた。なぜだろうか。くだらないと思っている部分があった。

ギイの言葉を聞き、どれほど悩んだろうか。

結局、フォコンは意を決した。

涙をこらえ、愛する者の尊厳を守るために刃を振り下ろした。

奇跡の腕輪が赤錆に覆われ、乾いた音を立てて崩れる。

ベアトリスが浮かべた表情には、苦しみも痛みもなかった。

ただただ安らぎに包まれながら、ベアトリスは最期に愛しい弟子の体を抱き締め、その耳に何かを呟いた。

フォコンは滂沱の涙を流しながら己の長い髪を切る。

それを見て、ベアトリスは満足げに息を引き取った。

そこでようやく気づく。フォコンが少年だということに。

だからギイは小僧と呼んでいたのか。女装させていたのは、カタリ派の信徒は異性に触れられないからだろうか。様々な思考が混濁し——目前の全てがどうでもよくなっていった。

【魔導街区】やその住人、人狼の驚異や赤い帽子の魔女ですら黒く塗り潰されたように消えていく。

最後に、ミシェル自身だけがぽつんと取り残された。

旅籠に戻って一夜を明かしたミシエルの前に、清々しい朝の空気をまとってマリーが現れ、顛末と原因について語った。

ベアトリスは黒い人狼の犠牲者として扱われることになった。男の姿に戻ったフォコンは医院を引き継ぎ、ギイは仲間捜しを諦めず古い森の奥へと分け入ったという。

ベアトリスの奇跡の腕輪には、星々の間に住まう奇怪な虫の卵が付着しており、それは寄生した生き物の意思や願望に応じて姿を変えるのだそうだ。

ベアトリスは包囲されたモンセギュールで偶然それを拾い、そのときに抱いていた肉体の死への恐れ——カタリ派にしてみれば、最も忌避すべき感情に腕輪は反応したのだった。黒い獣と化し、独り包囲網を突破したベアトリスは、不老不死となった我が身を激しく呪い、怪物の力を抑える方法、そして不死を殺す方法を探求するようになった。

最近になってそれが活性化していたのは、次の星の虫が彗星という形で来訪しつつあったからだ。ル・ショドロニエが凶兆と、ヴェルミクルスが吉兆と捉えた星辰の変化がそれを示していた。

つまり、黒い獣は退けたものの、次なる脅威が目前に迫っているのである。

そんな話を全く悪びれもせずにして、マリーは去っていった。

ミシエルのさして気にもせずに見送ると、ペンを取り、

「明白な異端は認められないが、森の奥に残る異教の影響が聖別都市ヴィヨンヌには見受けられる」

教皇庁への報告文に、そうしたためた。

幼い頃、書物から思い描いた幻想の世界に手が触れるほど迫った——それは夢のような出来事であるはずだった。

それを、砕かれた。

人狼と黒い怪物と少女が繰り広げた争いも、自分は蚊帳の外に追いやられていた。

この一件において、自分が果たした役割とは何か。

——ただの餌だ。

夜の森で襲われたのは偶然だろうが、それがきっかけとなって自分は餌にされたのだ。人狼——ギイをおびき出すための餌に。

間違いなく、ベアトリスとマリーの共謀だ。フォコンにギイを斬らせ、そしてベアトリス自身を斬らせる。失敗した場合にはギイがとどめを刺すだろうと予見していたのだろう。

ミシエルはそれに利用された。

異端審問官としてでなく、ミシエル・カルパンティエ自身の人間性も関係なかった。

誰でもいい役をあてがわれた——それが何より業腹だった。

この幻想の地に、ミシエルの居場所はなかった。拒まれてしまった。

かつて想いを寄せた女のことを思い出す。十数年前も昔の片思い。すでに相手の顔も曖昧になっている。

なのに激情だけが沸き上がる。恋の熱ではなく怒りだった。自分を蔑ろにし、他の男へ走った女への怒り。それも、あんな異端かぶれのくだらない男などを選んだ。

許せなかった。だから、異端を排斥する立場になろうと決意したのだ。

「――そうだ、異端審問だ」

思いを新たにする。俺はただの男ではない。凡夫などでなく、餌として利用されるような存在でもない。

俺は異端審問官だ。それこそが俺の力だ。手引書を愚直に守るだけでは足りない。拡大解釈が必要だ。ベルナル・ギイの『異端審問の実務』第六章――「魔導師、占者、悪魔の祈願者」への訊問についての解釈を押し広げる。

そして、このおぞましい幻想の地の住人に神の御力を思い知らせてやる。

「滅ぼすべきは（アド・アボレンダム）――」

慄け、怪物ども。

「根絶のために（アド・エクステイルパンダ）――」

震えろ、魔導師達。

「神は神の者を知りたまう」

神の者でないおまえ達に、俺の意志を以て不可避の鉄槌を落としてやる。

こうして、異端審問官ミシエル・カルパンティエはアヴェロワーニュへの残留と、そして復讐を決意した。

余談ではあるが――この後、異端審問は悪名高い魔女狩りへと変質を遂げ、一四八六年にミシエルと同門である二名のドミニコ会士が著した書物が大いに活用されることとなる。

〈了〉

ラベニュー・ドウ・メルヴェイユー

<http://p.booklog.jp/book/81442>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81442>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81442>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ